

「筆箱」

ある日の放課後、小さな事件が起きた。A子さんがトイレに行っている間に机の上にあるはずの筆箱がなくなっていたという事件である。

Aさんは筆箱がないと気づくとすぐさまその場にいた六人をうたがった。もちろん六人も否定した。Aさんが絶対に犯人ではないと確信したのは、六人のうちの一人である親友のBさんである。Bさんは小さいころから知っているおさななじみで、Aさんが一番信用している人物であった。一方、Aさんが最もこの人がうたがわしいと思った人物はクラスの問題児であるCさんだ。AさんはCさんをおいつめ、おいつめた。しかしCさんは否定をした。Cさんは自分をおいつめてくるAさんに腹を立てAさんに暴行し、足にけがを負わせてしまった。Aさんは保健室へ行きそのまま車で帰り一日が終わった。次の日、Aさんは足をギプスで固定して学校に来た。

この小さな事件であったはずの事件が次々と広まっていった。ついに先生の耳まで入ってしまった。Cさんはひどくしかられたが、Cさんの荷物からAさんの筆箱を探しても出てこなかった。そしてとうとうCさんとAさんの親友を除いたクラス全員の荷物検査がはじまった。クラス全員の荷物からもAさんの筆箱は出てこなかった。はやくこの事件を解決してほしいとクラスのだれもがそう思った。

そしてついに先生のところへ事実をいにくた人がいた。その人物はAさんの親友であるBさんだ。Bさんは「自分がやった。」と自白したそうだ。みんなはひとまず安心した。そうだが、被害者のAさんだけは違った。Aさんはずっと信用してきたBさんが自分をうらぎったことにはらを立て、Bさんを断じてゆるさなかった。この事件の犯人がAさんの親友であったBさんだとはだれも想定できないことだった。

なお、BさんがなぜAさんの筆箱をかくそうとしたのかという理由は分からない。まだ。